ガジャ・マダ大学

(Universitas Gadjah Mada)

I 設立の経緯

インドネシアの歴史の中でもっとも強力な王国であり，インドネシア人の最大の誇りであるマジャパヒット(Madjapahit) 王国の最盛をもたらした総理大臣ガジャ・マダ (Gadjah Mada) の名を冠しているガジャ・マダ大学は，その建学の歴史をインドネシアの独立運動との関連の中にもち，濃い民族主義の中に生まれたものであった。すなわち，日本の敗戦後オランダがジャカルタ，バンドン，スマラン，スラバヤなどに再進駐してきた時，それらの地区にいたインドネシア人の学者たちが独立戦争当時のインドネシア側の首府であったジョクジャカルタ周辺にのがれて，そこに幾つかの単科大学を作っていたのが，スルタン，ハメンク・ブオノ9世 (Hamengku Buwono IX) の好意により，スルタン所有の建物や土地が供与され1949年12月19日総合されてインドネシアの最初の国立大学として誕生したものである。だからここに勤める教師，職員や学生たちにとって，このインドネシア民族の作ったインドネシア最初の国立大学であることが大きな誇りになっているのである。建学当時の学生数は500人足らずであったが，現在は15学部1万8000人の学生をもつインドネシア最大の総合大学となっている。

II 学園の特色

こうした事情で生まれたのであるから，それが落ち着いた平安な牧歌的な姿の多分に残っている昔の王領のジョクジャカルタに位置しているとはいえ，学園の中のふんい気や学問に対する態度には相当民族主義的なものがみられる。あらゆる学部の学生に必須として建国5原則のパンチャ・シラ (Pantja Sila) や政綱5原則 (Manipol Usdek) を教えていることや，学生に多くの国民党政策の支持者が見られるのもその1つの表われといえようが，そのほかにも，時には排他的な感じを他に与えることがあるほど，自分たちの社会に貢献することをなによりも尊いこととしている姿勢が随所にみられる。そしてこのことは，民族の自立のために積極的に社会をリードしていこうとする強い意欲となって表われている。

したがってこのことと関連して，もう1つこの大学のとくに目だつ特徴は，その学問的態度がきわめて実践的であるということである。そのことは学生に与えられている学科目やその講義内容が社会にでてすぐ応用できるものに重点がおかれていることや，また多くの学部で卒業論文として，机上の考究でなく実際の1地域や工場などを選んで，それを技術学的なり，経済学的なり，社会学的なり，政治的なりなどの観点から現状を説明し分析することが要求されていることなどにも示唆されているように思われる。この実践性の強調は，指導階層の不足に悩みつつ新しい国づくりに励んでいるインドネシアの現実の事態のもたらす強い要請のうちに，大学が社会一般と一体になり，社会の指導的役割を果たさざるをえない事情を反映しているのであるが，ここに社会環境のもたらした象牙の塔といったのとは異なる大学のあり方が見られ，こういったなかから新しい学問方法が生まれることも期待されるかもしれない。

III 経済学部

さてガジャ・マダ大学の経済学部は，その基礎にこういった2つの特徴を他の学部よりもより強いくらいに保持しながら，工業経済学科，国民経済学科，農業経済学科，組合経済学科，貨幣および銀行経済学科と5つの学科に分かれ，それぞれの卒業学科によって将来の職がおおよそ決定される。現在のところ卒業生は就職の心配はなく，社会は高い地位を用意してかれらの卒業を待っているのである。

学部長は学部創設以来7年間学部長を勤めたクルタヌガラ (Kertanegara) 教授に代わって，経済史担当のスポヨ (Soepojo) 講師が今年度からその任に当たり，経済学部の講師45人のうちのほとんどはフォード財団の援助でウィスコンシン大学などに留学の経験をもっている。

この経済学部にはまた付属機関として，経済研究局 (Biro Penelitian Ekonomi) がある。これは1956年8月創設されたものであり，予算の関係でその活動が制限されている事情にあるが，現在までに行なった調査として次のものがある。

(1) 中部ジャワにおけるバテック工業の研究（これは学術雑誌 *Ekonomi dan Keuangan Indonesia,* May/June, 1958（インドネシア語）および July, 1958（英語）に掲載された)。

(2) ジャワにおける精糖工場の研究

(3) ジョクジャカルタの1工場の会計方法に関する研究

(4) インドネシアの熟練技術労働力に関する研究（*Ekonomi dan Keuangan Indonesia,* May/June, 1958 に掲載された）

(5) ジョクジャカルタ特別行政地区における家計調査に関する研究

(6) 1959年のインドネシアの国民所得推計

(7) ジョクジャカルタ特別行政地区における生計費に関する研究

また次項の共同体発展諸部門総合委員会の1参加機関としてジョクジャカルタ近郊のイモギリ周辺の極貧村落を対象とする発展計画に参加している。

Ⅳ　共同体発展諸部門委員会と経営合理化局

ガジャ・マダ大学の特長をこのようにみるとき，共同体発展諸部門委員会 (Persatuan Seki² Pembangunan Masjarakat) と経営合理化局 (Balai Pembinaan Administrasi) に言及しておくのがよいであろう。前者は総長の直属にあり，各学部で研究され考察されている事態を実際の社会の発展に役だてようとするもので，イソ (Iso) 教授を委員長として地質学，教育学，農学，経済学，社会学，行政学，社会衛生学，医学，農業経済学，畜産学，微生物学，獣医学，食品衛生学，技術学などの代表者が集まって共同体の発展方式を考え，それを実地に応用してみようとするものである。すなわち，たとえばあるものは水道施設を，あるものは診療所を，あるものは組合活動を，またあるものはその社会の公衆衛生問題をといった具合にいろいろの角度からある1つの社会の発展を考えようとするのである。まだ歴史は浅く，また予算関係などもあり順調にはいっていないが，現在のところガジャ・マダ大学および政府の協同組合局の資金援助をうけてジョクジャカルタ特別行政地区のもっとも貧しい2地域を選んで，その村落共同体発展計画実行にとりかかったところである。この計画の性質はインドネシア語で Projek Ponjelidikan/Pertjobaan/Pertjontohan といわれ，1つのパイロット的計画であるが，政府も関心をよせているばかりでなく，その計画の内容や成果いかんによっては学術的にも1つのおもしろい企画になろう。

経営合理化局の方は，各官庁や国有企業などの職員の教育機関で，1つの学部のごときスタッフや設備をもっている。そこでは工場経営などが講義されているのであるが，ここにも大学が社会をリードし，社会の発展の中心機構の1つとしての役割を果たしている姿が見られる。

Ⅴ　第2回国家学術会議

以上のようなガジャ・マダ大学の活動のほかに，もう1つ学術活動に関して忘れることのできないのは，昨年10月，第2回国家学術会議 (Kongres Ilmu Pengetahuan Nasional II) がこのガジャ・マダ大学で行なわれたことである。この国家学術会議というのは4年に1度開かれるもので，第1回のマランに次いで，第2回はこのガジャ・マダ大学で行なわれたのである。この開会式にはスカルノ大統領も出席し，約1000人のあらゆる部門の学者が集まり，約1週間にわたる活発な議論が行なわれた。経済学部門でも国有企業，協同組合，民間企業のそれぞれのあり方の問題，分配問題，国有企業の利潤問題，地域経済開発問題，経済の合理性の問題などが論議された。

この国家学術会議がガジャ・マダ大学で行なわれたことは，インドネシア全体の学術活動に大きな寄与をなしたとともに，ガジャ・マダ大学自身にとっても大きな刺激を与えたように思われる。十何年かの歳月とともに制度的にはほぼ落ち着いてきたガジャ・マダ大学が，こういったことを契機として今後いかに学術的にいっそう発展してゆくかは大いに期待すべきものがあるように思われる。

（アジア経済研究所海外派遣員　鈴木長年）

——在バンドン——